

[研究室だより]

研究室を訪れた人々（2003年度）

2003年6月6日（金）

エカテリーナ・シーモノヴァ=グゼンコ教授特別講演

「中世日本とロシアにおける地理的空間の概念」

Симонова-Гудзенко Е.К. (ИСАА при МГУ), «Представления о географическом пространстве в раннесредневековой Японии и России»

講義は日本語訳つき、通訳河尾基（東京大学スラヴ文学大学院）。

シーモノヴァ=グゼンコ教授は、モスクワ大学アジア・アフリカ研究所（Институт стран Азии и Африки）で教鞭をとる日本古代史の専門家。龍谷大学客員教授として日本滞在中のところ、東京でも特別講演をしていただけたことになった。講演の内容は日本とロシアの両方を扱った文化記号学的・比較文化的アプローチによるもので、ロシア研究者と日本研究者のどちらにも興味深い内容だった。なお、シーモノヴァ教授は東京大学とモスクワ大学の学術交流の発展のために尽力されており、この講演は両大学間の協定に基づく学術交流活動の一環として行われた（2003年10月には、両大学間の学術交流協定に基づき、東京大学から史料編纂所の保立道久教授がモスクワ大学アジア・アフリカ研究所に招かれ（国際交流基金日本研究教授派遣助成プログラムによる）一ヶ月ほど客員教授として講義をしたが、その際のモスクワ大学側の受入責任者をつとめられたのもシーモノヴァ=グゼンコ教授である）。

2003年6月13日（金）

アブドゥッラ・アリポフ氏特別講義

「ウズベキスタンの文化——その伝統と現在——」

講義・質疑応答・討論は原則としてロシア語、通訳なし。

国際交流基金の招聘により初来日されたウズベクの詩人、アブドゥッラ・アリポフ Абдулла Арипов 氏（1941年生まれ）をお迎えして、特別講義をしていただいた。アリポフ氏は日本では一般にはあまり知られていないが、現在ウズベキスタン作家同盟会長をつとめる同国の国民詩人的存在で、ウズベキスタン独立の際に新たに作られた国歌の作詞者でもある。詩作の他、ロシア語からウズベク語への翻訳でも大きな業績がある。

講義には駐日ウズベキスタン大使や、東洋史学の小松久男教授も出席された。ウズベキスタンの文化について同国の国民詩人から直接話をうかがえる貴重な機会だった。なおアリポフ氏からは、スラヴ文学研究室へのプレゼントとしてウズベクの民族衣装一式が手渡された。

2003年11月21日（金）

「ロシア語週間」——プローホロフ、デニセンコ、オジンツォワ氏特別講演
「ロシア語——現代ロシアと世界におけるその社会的・文化的役割」

報告・討論はロシア語、通訳なし。

2003年11月にロシア連邦外務省付属ロシア国際文化科学協力センターから12名のデレゲーションが日本に派遣され、「ロシア語週間」という行事が行われた。スラヴ文学研究室は、ロシア国際文化科学協力センター在日代表部の部長レオニード・A・ガムザ氏の提案を受け、代表団のうちの主だった方々をお招きし、特別講義をしていただくことになった。来訪された講師の方々は、以下の通り。

ユーリイ・E・プローホロフ プーシキン・ロシア語大学学長、代表団長。言語文化学、社会言語学、「言語の文化」(культура речи)、外国語としてのロシア語教授法の専門家。

ヴラジーミル・デニセンコ ロシア民族友好大学文学部長。外国語としてのロシア語教授法の専門家。

イリーナ・オジンツォワ モスクワ国立大学助教授。外国語としてのロシア語教授法、意味論的シンタックス、ロシア語の音声などの専門家。

講義にはこの他、代表団からさらにレオポリド・ロジンスキイ氏（ロシア国際文化科学協力センター文化・教育・科学技術プログラム部長）が参加した他、レオニード・ガムザ氏も出席し、ロシア国外におけるロシア語教育普及に関する有意義な懇談と意見交換が行われた。

2003年12月5日（金）

ブライアン・ボイド教授講演

「ヴラジーミル・ナボコフの真実の生涯——伝記作家の物語——」

講義・討論は英語（ロシア語も可）、通訳なし。

日本ナボコフ協会の招待により初来日されたブライアン・ボイド Brian Boyd 氏（オークランド大学英文科大学代表特任教授）を東京大学にお迎えして、*The Real Life of Vladimir Nabokov: A Biographer's Tale* というテーマの特別講義をしていただくことができた。ボイド教授は世界有数のナボコフ研究者として国際的に知られ、ナボコフ伝の金字塔とも言うべき巨大な二冊の著書

Vladimir Nabokov: *The Russian Years* (Princeton U.P., 1990); Vladimir Nabokov: *The American Years* (Princeton U.P., 1991) や、『青白い炎』に関する画期的な新説を展開した *Nabokov's Pale Fire: The Magic of Artistic Discovery* (Princeton U.P., 1999) などの著書がある（日本でもちょうどナボコフ伝の第一巻が『ナボコフ伝——ロシア時代』（上・下、諫早勇一訳、みすず書房）として邦訳・出版されたばかりのタイミングだった）。今回の特別講義では、この評伝執筆のための膨大な調査の過程での苦労や発見の数々について興味深い裏話も含めて話していただいた。なお、この講義の内容について詳しくは、スラヴ文学大学院博士課程の平松潤奈さんによるレポートが日本ナボコフ協会会報『Krug/Kpyr』 Vol.V, No.2 に掲載されている。

2003年12月15日（月）

マイケル・ハイム教授来訪

カリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）のスラヴ学科教授であり、チェコ語、セルビア語、ロシア語、ハンガリー語など多くの言語からの翻訳で高名なポリグロット、マイケル・ヘンリー・ハイム Michael Henry Heim 教授が翻訳をめぐる国際学会のために来日され、われわれの研究室のメンバーとも懇談の一時を持った。アメリカのスラヴ研究の現状から現代世界文学の翻訳まで、広範な話題について活発に懇談が行われた。

2004年1月30日（金）

作曲家・ピアニスト・詩人レーラ・アヴェルバッハさんを迎えて 「詩のコンサート」（自作詩の朗読）・音楽と詩をめぐる懇話

レーラ・アウエルバッハ（アヴェルバッハ）Лера Авербах (Lera Auerbach) さんは、1973年ロシア・チエビヤビンスク生まれの作曲家・ピアニスト・詩人。現在ニューヨーク在住。多面的な輝かしい才能により現在国際的に注目されている若きスターである。今回、レコーディングのために来日された機会を利用して、私たちの研究室で、特別な「詩のコンサート」（自作詩の朗読会）を行っていただいた。詩の朗読以外にさらに彼女自身の音楽や詩をめぐって、興味深いお話をじっくりうかがうことができた。この企画は、アウエルバッハさんのCD製作を担当されているキングインターナショナル（B I S）の宮山幸久さんのご好意によるものである（なお、この時録音されたCDは、2004年6月に『トルstoiのワルツ』と題されてキングインターナショナルから発売された。トルstoiを初めとして、グリボエードフ、オドエフスキイ、パステルナーク、ディアギレフなど、ロシアの、プロの作曲家ではない文学者や芸術家によるピアノ曲を集めた極めて珍しいアルバムである）。アヴェルバッハさんについてより詳しくは、以下のサイトを参照のこと。

<http://www.shinsekai-trading.com/hp-artst3.htm>

<http://www.leraauerbach.com/>

関係行事

2003年7月4日（金）午後4時～6時30分

スターリン没後50周年シンポジウム

「<スターリン>とは何だったのか？」

場所 東京大学文学部法文2号館2階 文学部1番大教室

主催 東京大学大学院人文社会系研究科・文学部スラヴ文学研究室

報告

馬場朝子（NHK）「スターリン50年目の真実——新発見アーカイブ資料と映像で探る」

亀山郁夫（東京外国语大学）「二枚舌とテロル——プロコフィエフとスターリン」

沼野充義（東京大学）「<文化としてのスターリン>時代へ」

スターリン没後50年を迎えた現代にあって、改めてスターリンという現象とは何だったのかを問い合わせる試み。ロイ&ジョレス・メドヴェージエフ『知られざるスターリン』（現代思潮新社、久保英雄訳）が出版されたことからもわかるように、いまだに謎のヴェールに包まれたままのこの時代への関心が高まっている。このシンポジウムでは、スターリンの伝記や政治闘争の実像に迫るとともに、文学・芸術などの様々な側面から広い文脈で「<文化としてのスターリン>」を捉えなおし、現代の研究水準を踏まえて全体主義時代の文化へのアプローチを試みた。幸いこのテーマに関心を持つ多くの熱心な観衆を集め、シンポジウムはほぼ満員の大教室（参加者200名程度）の熱気の中で行われた。

2003年10月17日（金）午後4時～6時30分

シンポジウム「ブンガク畑でつかまえて——外国文学の楽しみ——」

場所 東京大学法文2号館2階 文学部1番大教室

共催 東京大学文学部西洋近代語近代文学研究室・多分野交流プロジェクト演習

パネリスト

池内紀（ドイツ文学、作家）、堀江敏幸（フランス文学、作家）、中村和恵（英語圏文学、詩人）、柴田元幸（英米文学）、沼野充義（ロシア東欧文学）

英米独仏露波、クレオールなど、さまざまなフィールドで仕事をする外国文学者が一堂に会し、外国文学を読み、研究し、翻訳することの楽しみや苦労を語り合うシンポジウム。外国語、外国文学に興味を持つ多くの聴衆を集め、立ち見が出るほどの満場の熱気の中で活発な議論が展開された。なおこのシンポジウムの模様は、『新潮』2004年1月号に「外国文学は『役に立つ』のか」としてほぼ全文が掲載された。

外国人研究員の受入

ドミトリー・コヴァレーニン氏 2003年6月～2004年6月

ドミトリー・コヴァレーニン *Дмитрий Коваленин* 氏（1966年生まれ）は、現代日本を専門とするロシアの翻訳家・評論家。日本に10年以上滞在した経験を持つ、現代ロシア随一の日本通であり、村上春樹を最初にロシア語に訳し、現代ロシアにおける村上春樹ブームに火をつけた立役者として知られている。今回コヴァレーニン氏は国際交流基金の招聘フェローシップを受けて1年間の予定で来日され、その期間われわれの研究室で外国人研究員としてお迎えすることになった。研究テーマは「村上春樹の国際的受容とロシアへの影響」。

（沼野充義 記）